

「主の御名によって立ち向かう」

1 サムエル 17:45-49

鄭 ヒムチャン

おはようございます。

今朝もともに主の御前に集まり、みことばを頂けることに感謝いたします。

私たちは普段の生活中で、突如大きな壁にぶちあたることがあります。自分の手に負えない問題が立ちまわることでもあります。今日ともに見ていく聖書のことばは、世界中でよく知られている戦い、ダビデとゴリヤテの戦いからです。私たちが危機に瀕した時、私たちの目の前に巨大な壁が立ちまわった時、私たちはどう立ち向かっていけばよいのか。そのことをみことばから受け取りたいと思います。

1サム17：1-7

17:1 ペリシテ人は戦いのために軍隊を召集した。ユダのソコに集まり、ソコとアゼカの間にあるエフェス・ダミムに陣を敷いた。

17:2 一方、サウルとイスラエル人は集まってエラの谷に陣を敷き、ペリシテ人に対する戦いの備えをした。

17:3 ペリシテ人は向かい側の山の上に構え、イスラエル人は手前側の山の上に構えた。その間には谷があった。

17:4 一人の代表戦士が、ペリシテ人の陣営から出て来た。その名はゴリヤテ。ガテの生まれで、その背の高さは六キュビト半。

17:5 頭には青銅のかぶとをかぶり、鱗綴じのよろいを着けていた。胸当ての重さは青銅で五千シェケル。

17:6 足には青銅のすね当てを着け、背には青銅の投げ槍を負っていた。

17:7 槍の柄は機織りの巻き棒のようであり、槍の穂先は鉄で、六百シェケルあった。盾持ちが彼の前を歩いていた。

<エラの谷のイスラエル人>

舞台はエルサルムから南西24キロほどの距離にあるエラの谷、イスラエルとペリシテのそれぞれの軍は向かい合わせに丘の上に立ち、まもなく戦いの火蓋がきられようとしている状況です。エラの谷には緊張感が走り、まさに一触即発、緊迫した状態です。そこにペリシテから一人の代表戦士が出てきました。巨人ゴリヤテです。彼の風貌がいかなるものであったか、聖書は事細かく記しています。身長が6キュビト半、1キュビトが約44センチですから、約2m90cm。とてつもない高さです。その巨体に青銅の兜、鱗とじの鎧を着け、なんと胸当ての重さだけで5千シェケル、1シェケルが11・5グラムですので、胸当てだけで57キロものの重さになります。青銅のすね当て、青銅の投げ槍、その槍の柄は機織りの巻き棒のごとく太く、槍の穂先は六百シェケル、槍の穂先だけで約7キロです。誰もが恐れるような巨人の戦士が物々しい装備で出てきたのです。

サムエル記 13 章にはこんなことが記されています。

1サム13：19-22

13:19 さて、イスラエルの地には、どこにも鍛冶屋を見つけることができなかった。ヘブル人が剣や槍を作るといけない、とペリシテ人が言っていたからであった。

13:20 イスラエルはみな、鋤や、鍬、斧、鎌を研ぐためにペリシテ人のところへ下って行っていた。

13:21 鎌や、鍬、三又の矛、斧、突き棒を直すのに、料金は一ピムであった。

13:22 戦いの日に、サウルやヨナタンと一緒にいた兵のうちだれの手にも、剣や槍はなかった。ただサウルと息子ヨナタンだけが持っていた。

イスラエルには当時どこにも鍛冶屋がなく、青銅や鉄製の武器がなかったのです。そんな状況の中、出てきたペリシテの代表戦士は見たこともない巨大な体であるだけではなく、見るからに強力な最新鋭の武器を携えてやってきたのです。そのゴリヤテがイスラエルの戦士たちをあざ笑いながらこう言います。「俺と一騎打ちをしよう、負けたほうが奴隷になるのだ。イスラエルの陣を愚弄してやる。」このゴリヤテを姿を見て、またゴリヤテの言葉をきいたイスラエルの反応が聖書にこのように書かれています。

1サム17：11

17:11 サウルと全イスラエルは、ペリシテ人のことばを聞き、気をくじかれて非常に恐れた。

イスラエルの民たち、いや戦いを指揮する王サウルさえも気を挫かれ、恐れおののいている。イスラエルの暗い未来を予感させます。神の民イスラエルはいったいどうなってしまうのでしょうか。続く箇所を見てみましょう。

1サム17：12、15-17

17:12 さて、ダビデは、ユダのベツレヘム出身の、エッサイという名のエフラテ人の息子であった。エッサイには八人の息子がいた。この人はサウルの時代には、年をとって老人になっていた。

17:15 ダビデは、サウルのところへ行ったり、帰ったりしていた。ベツレヘムの父の羊を世話するためであった。

17:16 例のペリシテ人は、四十日間、朝早くと夕暮れに出て来て立ち構えた。

17:17 エッサイは息子ダビデに言った。「さあ、兄さんたちのために、この炒り麦一エパと、このパン十個を取り、兄さんたちの陣営に急いで持って行きなさい。

<ベツレヘムのダビデ>

聖書は 12 節で「さて」という言葉を語ると、急に違う場所の話語り始めます。聖書はあの物々しい緊張感と殺気が漂っているエラの谷から急に離れ、突如ベツレヘムの 1 人の少年の物語を語り始めます。羊飼いの少年ダビデです。緊張感の漂うエラの谷とは大違いで、こちらは牧歌的でのどかな風景が浮かんできます。戦場とは異なる、場違いとも言っているいい光景です。しかし、今日神の民イスラエルの救いはここからはじまるのです。

聖書は急に場面をエラの谷からベツレヘムのダビデのもとへの場面を移し、ダビデが父の使いとしてエラの谷にたどり着く 20 節まで続きます。12 節から 20 節までベツレヘムのダビデのことが書かれているのです。しかし、その間の 16 節で再び少しだけ差し込まれるようにまたあの緊張感漂うエラの谷の姿が記されています。

1サム 17:16 例のペリシテ人は、四十日間、朝早くと夕暮れに出て来て立ち構えた。

私たちはこの 16 節の言葉を通して、エラの谷でのイスラエルの民たちの姿とベツレヘムのダビデの様子が同時に進行していることがわかります。エラの谷にいるサウル王とイスラエルの兵士たちの 40 日、そしてその間ベツレヘムにいるダビデの日常が同時にみことばを読む私たちの頭の中に広がっていくのです。

<エラの谷を包む恐れの本質、自己責任>

エラの谷のイスラエルの民たちの 40 日間を考えてみましょう。先程見たように、サウル王をはじめとするイスラエルの兵士たちは、ゴリヤテを見て気を挫かれ、恐れています。それでも神の民イスラエルです。こういう時にこそ神様を信頼して、勇気を出して欲しいところです。しかし、恐れています。確かに巨大な戦士があらわれ、その体と手には強力な武器がある。恐れる理由ははっきりしています。ですが、イスラエルの恐れの本質はより深いところにあるように思います。

ここまでのイスラエルの歩みを振り返ってみますと、サムエル記以前のイスラエルという国は王が国民を統治する、いわゆる王国ではありませんでした。周りには王国がいくつもあったのですが、イスラエルはそうではなかったのです。しかし、イスラエルという国の本当の姿をよく見ていくとわかることは、イスラエルは始めから王国であったということです。それは神が王としてイスラエルを統治しておられたからです。しかし、イスラエルの民は神が王として支配してくださっていることに満ち足りることなく、他の国のように私たちにも立派な王が必要であると懇願するのです。それは神様の目にもそして預言者サムエルの目にも悲しいことでした。しかし、神様は民たちの懇願にこたえられ、王を立てることを認められます。

1サム 8:22 主はサムエルに言われた。「彼らの言うことを聞き、彼らのために王を立てよ。」

彼ら、イスラエルの民たちのため選ばれたイスラエル初代の王はサウルという人物です。サウルという人物がどんな人物であったかも、その記され方は印象的です。聖書はこのように記しています。

1サム 9：2 「彼は美しい若者で、イスラエル人の中で彼より美しい者はいなかった。彼は民のだれよりも、肩から上だけ高かった。」

イスラエルの民はサウルが王として立てられ大いに喜びました。ついに我が国にも念願の王が立てられた。サウルは誰よりも美しく、そして誰よりも背が高い。実に頼りがいのある王が我が国に立てられたと喜んだのです。しかし、イスラエルが王を求めた一連の姿、選び出された王の姿からイスラエルの

民たちの内なる心が見えてきます。それは人の力、人が持つ能力を拠り所として生きていきたいという心です。

このイスラエルの民たちの内なる心は、以後王として立てられたサウルの言動を通して益々明らかになっていきます。サウル王は神様のみことばに従うこと、また神様を礼拝することよりも戦利品や兵士たちの志気、人間的なことを優先するようになります。結局サウルは神様の言葉から離れ、神様を必要としなくなりました。その姿に神様は心痛められ、神様もまた御自身を退けたサウルを退けられ、新しい王を選ばれます。それがダビデです。神様は今度はダビデが選出される時、このようにサムエルに語りかけられました。

1サム16：1「さあ、わたしはあなたをベツレヘム人エッサイのところに遣わす。彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したから。」

少年ダビデが王として選出されます。「私のための王」、まさにダビデは神のために選出された王でした。神様はダビデを選出される際、私たちもよく知っているとても印象的なことばを語られます。

1サム16：7「人はうわべを見るが、主は心を見る。」

サムエルがエッサイのもとに行った時、ダビデはその場におらず兄たちが先に紹介されました。サムエルはその中の長男エリアブを見て、きっとこの人が王になる人だとおもいました。それはエリアブという人が相当にできると思わせるような優れた容姿だったからです。しかしその時神様は、「彼の容貌や背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」と告げられました。

この言葉はサムエルに語られたことばですが、私はこの言葉が当時のイスラエルの姿をまるごと語っていることばだと思います。神様のことばからわかることは、イスラエルの民たちが追い求めてきたことはうわべの世界であるのだということです。うわべの世界、つまりそれは人の力、人がもつ能力を生きていくための拠り所をしている世界です。

もう一度エラの谷で起こっていることを考えて見ましょう。神の民イスラエル、何故今イスラエルは恐れているのでしょうか。それはゴリヤテという存在がうわべの頂点だからです。ゴリヤテに出会う直前まではイスラエルには誇るべき力ある人がいたのです。あの誰よりも背の高かった我らが王サウル。しかしゴリヤテはサウルなんかよりも遥かに背が高い、力は計り知れないほど強そうで、武器はもはや比べ得ることもできない。そのゴリヤテが40日間朝夕とあらわれては、イスラエルに戦いを挑み、罵り、負ければペリシテの奴隷にしてやると叫びだす。

うわべの世界 一人の能力を生きていくための拠り所とする— ということをもう少し掘り下げて考えてみますと、それは、私の人生は自分の力で切り開いて行きますという自己中心の心です。能力が発揮できて、うまくいくときは良いのです。幸せに思えます。しかし、もはや自分の能力が太刀打ちできないという状況に出くわした時、やってくるのは凄まじい恐怖、不安なのです。今日のイスラエルの姿で

す。私の人生は自分の力で切り開いて行きますという生き方は、裏を返せば、困ったときも自己責任で対処しますという生き方なのです。故にどうしてもなくなった時でさえ、自分でどうにかしなくてはいけないけれども、どうしてもない、どうすればいいのだというような恐怖が訪れるのです。

今日のイスラエルの姿から私自身非常に問いかけられました。
うわべの世界を求めているか、うわべの世界に生きていないか。私たちはどうでしょうか。

<神様が救ってくださるという世界>

今日恐れるイスラエルの民たちを傍らに置き、聖書はいきなり舞台をベツレヘムに移します。聖書は今日このみことばを読む私たちとうわべの世界とは全く別の世界、全く違った捉え方があるのだと教えてくれているのです。ベツレヘムで羊飼いと生きていた少年ダビデ、彼はエラの谷のイスラエルの民たちとは違う世界に生きていました。彼がどんな世界に生きていたのか、聖書はそれを記しています。34-37 節を見てみましょう。

ダビデがベツレヘムで羊飼いをしていた時のことをサウル王に話しているところです。

1サム17：34-37

17:34 ダビデはサウルに言った。「しもべは、父のために羊の群れを飼ってきました。獅子や熊が来て、群れの羊を取って行くと、

17:35 しもべはその後を追って出て、それを打ち殺し、その口から羊を救い出します。それがしもべに襲いかかるようなときは、そのひげをつかみ、それを打って殺してしまいます。

17:36 しもべは、獅子でも熊でも打ち殺しました。この無割礼のペリシテ人も、これらの獣の一匹のようになるでしょう。生ける神の陣をそしたのですから。」

17:37 そして、ダビデは言った。「獅子や熊の爪からしもべを救い出してくださった主は、このペリシテ人の手からも私を救い出してください。」

ダビデは羊を飼いながら経験してきたことを語ります。羊を襲ってくるライオンや熊に立ち向かい倒してきたということです。驚くべきダビデの戦闘力です。しかし、本当に驚くべきことはダビデが言っている獅子や熊を倒すことができた理由です。「主が、神様が私ダビデを獅子や熊の爪から救い出してくださった」ダビデはこう言いました。

ダビデが生きてきた世界はどんな世界か。それはダビデのこの言葉からわかります。彼が生きていた世界とは、神様が救ってくださる、助けてくださるという世界です。私の人生は神様が切り開いてくださるのだという生き方です。

<主の御名によって立ち向かう>

私たちが日々の歩みの中で、ゴリヤテに出会います。意図せず出会います。とてもコントロールできないような大変な問題に直面させらにぶつかります。その時私たちは2つの分かれ道の前に立ちます。自分の力で切り開く道を歩むのか、それとも主が切り開いてくださる道を歩むのか。

私たちがよく知っているように、ダビデはこの後あの恐るべき巨人ゴリヤテに驚くべき勝利を遂げます。しかし、実はダビデもまた戦いの前にこの分かれ道、岐路にぶつかりました。それは自分の国イスラエルの王サウルとの対面でした。

1サム 17：31-33、37-40

17:31 ダビデが言ったことは人々の耳に入り、サウルに告げられた。それで、サウルはダビデを呼び寄せた。

17:32 ダビデはサウルに言った。「あの男のために、だれも気を落としてはなりません。このしもべが行って、あのペリシテ人と戦います。」

17:33 サウルはダビデに言った。「おまえは、あのペリシテ人のところへ行って、あれと戦うことはできない。おまえはまだ若いし、あれは若いときから戦士だったのだから。」

17:37 そして、ダビデは言った。「獅子や熊の爪からしもべを救い出してくださった主は、このペリシテ人の手からも私を救い出してください。」サウルはダビデに言った。「行きなさい。主がおまえとともにいてくださるように。」

17:38 サウルはダビデに自分のよろいのかぶとを着けさせた。頭に青銅のかぶとをかぶらせて、それから身によろいを着けさせたのである。

17:39 ダビデは、そのよろいの上にサウルの剣を帯びた。慣れていなかったので、ためしに歩いてみた。ダビデはサウルに言った。「これらのものを着けては、歩くこともできません。慣れていませんから。」ダビデはそれを脱いだ。

17:40 そして自分の杖を手に取り、川から五つの滑らかな石を選んで、それを羊飼いの使う袋、投石袋に入れ、石投げを手にし、そのペリシテ人に近づいて行った。

ダビデも分かれ道の前に立ちました。それは権威ある王サウルからの「武器を取りなさい」という命令です。「武器の力で戦え」という誘いです。ダビデはサウル王が着けさせた武器を一度は身につけました。しかし、ダビデはすぐにその鎧を脱ぎ捨て、剣を下ろします。

このダビデがサウル王からの武器を返上したということは、人の力で戦うということの放棄、決断であると思うのです。ダビデは人の力を拠り所としませんでした。ダビデの心は武器の力、人の力によるものではない、別のもの、別の方に支配されていたのです。武器を捨てた、ダビデはサウル王の元から動き出します。自分の杖を手に取り、谷の川に行き行って石を拾い始めました。川辺から滑らかな石5つを選びだすと、それをいつも使ってきた羊飼いの投石袋に入れました。

ダビデは武器を取らず、川で石を拾いました。ここは戦場の谷、緊張感にみちた谷です。ダビデの行動は誰も予想だにできなかった行動でした。サウルを始めとするイスラエルの兵士たちは、あいつは一体何をしているのだと思ったことでしょう。

ダビデが石を拾った時それはもはやおかしくなった人間のように見えたことだと思います。しかし、この石を拾うということにはダビデの明確な決断と告白がありました。ダビデが石を拾いそれをどこに入れたのでしょうか。40 節に羊飼いの使う袋、投石袋とかいてあります。ダビデは羊飼いです。この投石袋はいつも使っていたものです。猛獣から羊を守るためにその投石袋拾った石を入れてきた。今まで

ダビデはこの投石袋から石を出し、彼は羊を襲う猛獣を対峙してきました。ダビデが今まで猛獣を退治できた理由をこう言いましたね。「主が、神様が私ダビデを獅子や熊の爪から救い出してくださった。」

このことを考えるとダビデが石を拾ったという行為はただ単に慣れた戦い方をしようという思いではないと思うのです。この石を拾うという行動にダビデの無言の決意と告白がはっきりあらわれています。「神こそ、わが力です」という告白です。

ダビデはゴリヤテに立ち向かう時こう宣言しました。

1 サム 17：45-47

17:45 ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、私は、おまえがそしたイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かう。」

17:46 今日、主はおまえを私の手に渡される。私はおまえを殺しておまえの頭を胴体から離し、今日、ペリシテ人の軍勢の屍を、空の鳥、地の獣に与えてやる。すべての国は、イスラエルに神がおられることを知るだろう。

17:47 ここに集まっているすべての者も、剣や槍がなくても、主が救いをもたらすことを知るだろう。この戦いは主の戦いだ。主は、おまえたちをわれわれの手に渡される。」

私は剣と槍で戦うのではない。私は主の御名によって立ち向かう。神が戦ってくださる。これが勝利者ダビデの戦い方です。ダビデは袋の中に手を入れ、石を一つ取り、石投げでそれを投げます。投げられた石は巨人ゴリヤテの額を直撃。石は額に食い込み、巨人はうつぶせに地面に倒れるのです。ダビデは主によって勝利しました。

<勝利はいつ決まるのか>

「イスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かう。」この告白がダビデの口から発せられたのはゴリヤテと対峙したときです、しかしこの告白はすでに以前に彼の行動として現れていました。石を拾うダビデの行動にすでにこの告白がありました。

戦いの勝利はどこで決まるのでしょうか。実は、私たちが直面するほとんどの戦いは、戦場で勝つのではなく、戦いが始まるずっと前に勝つのです。一般的に見るならば、一番大事に思えるのは戦場、ゴリヤテに立ち向かう時でしょう。しかし、ダビデの勝利は川辺で石を拾ったところにすでにありました。主の御名によって戦うという決意がすでにここにありました。

いや、よく考えてみるとダビデの勝利はもっと以前にあったでしょう。あのベツレヘム地で石をひろっていたいつもの日々です。羊を襲ってくる猛獣から神様は私を守ってくださるとそう信じながら、繰り返し繰り返し石を拾ってきたダビデの日常です。ベツレヘムの日常の中でダビデはすでに勝利していたのです。

<日常で主を求める>

神様は今日、神様によって生きる人を探し求めておられます。それは特別なことではなく、華やかなことでもありません。日常で神様を必要とし、神様の喜ばれることを考える人です。

本当の勝利者はだれか。何かができるか、できないかではありません。特別な才能があるのかないのかでもありません。日常で、日々の生活で神を必要としている人です。私たちの人生にも、日々の歩みにもゴリヤテはやってきます。自分の手には負えない大変な問題に直面させられて、私たちは気を挫かれ、恐れおののいてしまう時があります。しかしもし私たちがそこで、「これは主の戦いだ」と捉えられたら、何でこうなってしまったのではなく、「これも全て主の御手の中にある戦いである」と、捉えられたら、その問題のへ向き合い方がもう全く変わってくるはずです。

今日聖書は私たちに頼りなさそうな一つの道を示します。ダビデの川に行き、石を拾う姿です。弱々しく、バカバカしく思えるでしょう。そんな石ころでどうやって巨人に勝てようか。あざ笑われて終わる姿が脳裏に浮かぶことでしょう。しかし、これは神が私とともにおられるという確信からくる信仰ゆえの積極的な行動であり、これはこの戦いのすべてを神の御手に委ねるという告白であり、私の武器は剣や槍ではなく神御自身であり、これはもはや私が戦うのではなく、神が戦われる神の戦いであるとの決意です。

騒ぎの中でも心を静め、主を見上げるのです。私たちはこれまで、いつものようにこれをしてきたのです。みことばと祈りによって、神様と語り、私たちの日常のあらゆる営みを主の御手に委ね、信じて期待してきたのです。そうです。これからもいつものようにしていくのです。小さく、弱く、頼りなくみえ、ある人の目から気休めとみえるかもしれません。しかし、ここに勝利があるのです。

詩篇 23 篇

詩篇 23:1 主は私の羊飼い。 私は乏しいことはありません。

詩篇 23:2 主は私を緑の牧場に伏させ いこいのみぎわに伴われます。

詩篇 23:3 主は私のたましいを生き返らせ 御名のゆえに 私を義の道に導かれます。

詩篇 23:4 たとえ 死の陰の谷を歩むとしても 私はわざわざを恐れません。

あなたが ともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖
それが私の慰めです。

詩篇 23:5 私の敵をよそに あなたは私の前に食卓を整え 頭に香油を注いでくださいます。
私の杯は あふれています。

詩篇 23:6 まことに 私のいのちの日の限り いくつしみと恵みが 私を追って来るでしょう。
私はいつまでも 主の家に住みます。